



# 女神なんて お断りですっ。4

紫南  
Shinan



レジーナ文庫

# 登場人物紹介



## カルツオーネ

魔族の王。  
その美貌で人々を  
虜にしてしまう。  
かつてシェリス達と  
パーティを  
組んでいた。

## エルヴァスト

第二王子。  
ベリアローズの友人で、  
天真爛漫な性格。

## ベリアローズ

ティアの兄。  
ひ弱で卑屈だったが、  
ティアの特訓により  
心身共に強くなった。

## ゲイル

ルクスの父で、  
凄腕の冒険者。  
ティアからは  
『ゲイルパパ』と  
呼ばれている。

## シェリス

『森の賢者』と呼ばれる  
ハイエルフ。  
ティアを前世から知っており、  
婚約者（自称）として  
溺愛している。

## ルクス

ティアの専属護衛。  
過保護で苦労性。  
ティアを妹のように  
思っていたが、  
その気持ちに  
変化が—？

## ティア

七歳の伯爵令嬢。  
前世で革命を起こして  
亡くなり、同じ世界に  
転生した。神からもらった  
『女神の力』をフル活用し、  
自由気ままに  
生きている。

## マティ

伝説の魔獣ディストラ。  
魔術で体のサイズと  
毛色を変え、  
子犬のふりをしている。

## 目次

女神なんてお断りですつ。  
4

書き下ろし番外編

女神の助言には裏がある

女神なんてお断りですっ。

4

## 第一章 女神への要請

人族の国から遠く離れた場所に、魔族の国がある。その国の王は夜も更けた時分、一人執務室で報告書を前に考え込んでいた。

艶やかな髪は長く、頭の後ろで高く結われている。薄暗い室内では黒にしか見えないが、実際は黒に近い紫だ。その色は魔族の中でも王家に連なる者にしか現れない。瞳にもこの色が出ているのは、王家の血が濃い証だつた。

「どうしたものか……」

気だるげに呟く王の美貌には、誰もが感嘆の溜め息をつくだろう。

そんな王が今、直面している問題は、本来ならばそう重要な事ではない。むしろ、この国では此事として片付けられるものでしかなかつた。しかし、今回ばかりは何かが引っかかる。

それは、ただの直感だつた。報告書を何度も読み、部下を呼んで確認する。そうして

現状を理解する事で、ようやく直感が確信に変わつた。

——何者が作爲した、間接的な国への攻撃。

「特定は……難しいか。だが……」

犯人の特定は現段階では難しい。今はまだ心配するほどの影響はないが、だからといつてそのままひと月も放置すれば、取り返しのつかない問題に発展するのは目に見えていた。

「昔より落ち着いたとはいえ、彼らも好戦的な種族だからな……攻める口実を与えるのは避けたいが……」

王が心配しているのは、人族との関係だ。国交を断つて数百年。寿命の長い魔族にとつてはそれほど昔の事でもないが、人族にとつては伝説となつていてもおかしくはない。魔族とはどんな種族なのか。それも正しく伝わっているとは思えなかつた。

問題が起きているのは、人族の国が密集する辺り。そこにある渓谷は、この国から遠く離れていても魔族の管理下にある。しかし、今魔族が近付けば、何も知らない人族は警戒するだろう。それどころか、国防を理由に攻めてくるかもしれない。

「面倒だな……」

その時、まるで天啓のように、かつての友人の顔が頭に浮かんだ。らしくないと苦笑

しながらも、王は筆を取る。

「まったく、アレに頼るなんて何百年ぶりだろうな」

こうと決めたら迷わない。サラサラと筆を動かし、手紙を書き上げていく。その友人がどんな顔をするのか想像して、思わず笑みがこぼれた。彼がいるのは人族の国であり、問題の場所までそう遠くないはずだ。きっと協力してくれるだろう。

書き上げた手紙を使い魔に託すと、王は中天ちゅうてんを過ぎた月を見上げる。思い出すのはもう随分昔——まだ国に束縛そくぱくされる前の楽しい日々。

予感がするのだ。それがいい事なのか悪い事なのかも分からないが、何かが起こる予感がする。



その日、天気は快晴で、絶好のピクニック日和ひよりだった。

ヒュースリー伯爵領の領都サルバ。その街の外、街道から少し外れたところに、森に囲まれた草原がある。ピクニックにはもつてこいの場所で、ここを遊び場にしている者達もいた。

今日もこの草原で遊んでいるのは、少々癖くせのある茶色の髪を後ろで結った、七歳の少女。名をティアラール・ヒュースリーといふ。ヒュースリー伯爵家の令嬢であり、巷ちまたでは神から祝福を受けた聖女とも呼ばれている。

しかしその実態は、妻腕まごわんの冒險者。伯爵令嬢である事を巧くわみに誇魔化こまかし、ティアと名乗って自由に動き回っていた。知的な輝きと好奇心で彩られた、濃い茶色の瞳が印象的だ。

つい先日、数十年ぶりにサルバおこなで行われた武闘大会。それに優勝した彼女は、その強さを世間に知らしめたのと同時に、両親にも冒險者としての高い能力を知られる事となつた。

そんなティアが、元気な声で遊びの開始を告げる。  
「ほおら、マティ。取つてこおい」  
《わあい》

子どもらしく無邪気にはしゃぐのは、馬ほどの大きな体をした赤い狼だ。最強の神獸と言われ、恐れられる伝説の獣けものディストレアの子ども。ティアからマティという名を与えられ、今や彼女のよき相棒となっている。

そんなマティがティアの命によつて走り出す。取つてこいと指示されたものは、前方

の森へと猛ダッシュしていく数人の少年少女だ。

「ま、ま、待つてくださいティア様つ。私、体力はっ……！」

「ラキア!! そんな事より早く森へ!!」

双子の兄達からラキアと呼ばれたのは、ティアよりも五つ年上の少女だ。ひょんな事からヒュースリー家のメイドになつた彼女は、今もメイドの服を着たまま爆走している。彼女にとつては、メイド服こそが戦闘服。幼い頃から、戦えるメイドになる事を夢見ていたのだ。

その横を走るのは、ラキアの双子の兄ユメルとカヤル。彼らも仕事着である執事服で走つていた。

「お前達、口より足を動かせッ！」

「〔〔〔はい!!〕〕〕

三兄妹の前を走るのは、ベリアローズ・ヒュースリー伯爵家の継嗣だ。妹のティアによって鍛えられ、魔術も使えるようになつた。まるでおとぎ話の王子様のような見た目をしているが、少し前まで他人嫌いで卑屈な性格だった。その性格もティアに矯正され、今や立派な跡取りとして周囲に期待されている。

【火弾】――

ベリアローズの放つた大きな火の球が、マティの足元に着弾する。それを見届ける前にベリアローズは加速した。足止めに成功したかどうかを、振り向いて確認している暇はない。

彼に続いて、ラキアとユメル、カヤルも全力で森へと突っ込んでいく。そんな四人とは違い、必死など全く感じさせないマティは、爆煙をフルフルと首を振つて消し、大声で呑氣に尋ねた。

《マティも魔術使つていい?》

「〔〔〔よくなない!!〕〕〕

森の中へ入つた四人が、空に向かつて吼える。

それを微笑みながら見物しているのは、ティアの両親——シャンとファイスタークだつた。

「ねえ、ファイスターク。あれは隠れんばのかしら?」

「いや、追いかけてこのはずだけどね。……ああ、『もういいかい』『まあだだよ』って

いう感じのやり取りだつたからかな?」

「ええ。隠れんばつてあんな感じなのよね? ふふつ、楽しそう」

子どもの時には体が弱くて、そんな遊びもできなかつたシアン。天然な彼女は、今にも『私も混ざりたいわ』と言い出しそうだ。

その隣に座るフィスタークも、愛する妻の願いを叶えてやりたいとは思つてゐる。だが、ティアによつて色々と仕込まれてゐるシアンは加減といふものを知らない。

フィスタークは、近くに座る父のゼノスバートに目配せする。いざという時は一緒に止めてくれと目で訴えたのだ。

その意味を正しく受け取つたゼノスバートは、無言で重い領<sup>うなず</sup>きを返した。

これら全てを離れたところで見守つていたのは、ゼノスバートの護衛兼、親友のゲイル・カランド。彼は、同じく見守つていた息子のルクスにしみじみと言う。

「なんていうか……今までの日常が夢みたいに思えてくるよな……もう別世界……」

不思議だなと唸るゲイルに、ようやく自分の苦労を分かつてもらえたかと、ルクスは涙を滲ませた。

ティアが五歳の時から護衛兼、保護者として傍<sup>そば</sup>についているルクス。二十代の若者としては苦労性な性格で、いつもティアに振り回されていた。

しかし、父のゲイルはこの国に数人しかいないAランク冒險者で、考え方も少し変わつてゐる。

「今の方が、めちゃくちや楽しいなつ」  
「……」

ゲイルは現状を嘆くのではなく、喜んでいたのだ。そのゲイルが今、目を輝かせながら見つめる先では、『球突き遊び』なるものが行なわれていた。

「娘ちゃんは、マジで天才だな」

「……一体、なんの『才』だ……？」

ゲイルの視線の先で繰り広げられているのは、先日の武闘大会の際、ティアがゲイルとの決勝戦で見せた魔術だ。空中に出現させた球を、玉突きのように連鎖的にぶつけ弾くもの。大会では石を使つていたが、今は全て風の球を使用している。

殺到する球の中心にいるのはクロノスだ。ラキア、ユメル、カヤルの兄で、今も語り継がれる最強の女騎士アリア・マクレートの子孫。彼はヒュースリー伯爵家に護衛として雇われて以来、時折こうしてティアに鍛えてもらつてゐた。

クロノスは向かつてくる球を剣で割り、次々と消していく。複数同時に向かつてくる球は、『金環舞<sup>きんかんぶ</sup>』という技で一気に消す。

しかし、減った分の球はすぐにティアが補充してゐるので、エンドレスで続いていた。「クロの奴、タフだなあ……俺が戦つた時よか球の速度は遅<sup>おそ</sup>えが、よく続くなぜ……やつ

ば、若さか？ 羨ましい……」

羨ましいのは果たして若さなのか、この状況なのか。ゲイルの表情を見ても、ルクスには判断できなかつた。

その時、ティアが唐突にゲイルを呼んだ。

「あ、ゲイルパパ。なんか結界の外にサラちゃんがいるんだけど？」

「何？ ザランが？」

ティアが魔導具によつて結界を張つてゐるので、この辺り一帯には誰も侵入できない。結界の外に冒險者仲間であるザランの気配を感じたティアは、精靈の力を借りて彼に用件を尋ねた。

精靈達がザランの言葉をティアに伝える。

『ますたーがよんてる』

『げいるといつしょに』

『きて〜』

「ギルドに来いってさ。ゲイルパパ、どうする？」

ティアにパパと呼ばれたゲイルは、顎をさすりながら答える。

「どうするつてもなあ……行くしかねえだろ」

こうして、ティアとゲイルはみんなより一足先に街へと戻る事になつた。



サルバ冒險者ギルドにある、ギルドマスターの執務室。そこには部屋の主であるシリス・ファイスマと、彼に呼び出されたティアとゲイル、そして王都から来た魔術師と騎士がいた。

シリスはハイエルフと呼ばれる種族の者で、もう五百年近くこのサルバでギルドマスターを務めている。それはなぜかといえば、昔、結婚を誓つた相手が生まれ変わつてくるのを、この地で待つていたのだ。

その相手とは、サティア・ミュア・バトラール。ティアの前世での名前だ。五百五十一年と少し前、とある事情で国を亡ぼし、自身も命を絶つた彼女。その行いによつて人々から『断罪の女神』と崇められ、絶大な力と前世の記憶を持つて転生したのだ。

そうして、シリスとこの地で再会を果たした。他人嫌いで気難しいシリスだが、ティアには異常なまでの執着を見せ、隙あらば求婚してくるのが少々問題だつた。

「呼び立ててすみませんね」

「いいけど、なんでソレで呼ばなかつたの？」

申し訳なさそうなシリスにティアが示したのは、彼の胸元に付けられている葉っぱの形のブローチだ。これはティアが【伝話信具】と命名した魔導具である。対となるブローチはティアが持つており、これによつて離れていても互いの言葉を届ける事ができる。

「それはもちろん……分かりますよね？」

「……うん……」

シリスの微笑みは語つていた。こんな奴らのために、貴重な通信の一回を使えるわけありませんよねと。

朝も夜も関係なく、時間があれば声が聞きたいと言つて通信してきたシリス。困つたティアは一日三回までと彼に約束させたのだ。

気を取り直し、ティアは顔見知りの騎士に問いかける。

「それで、どうしたの？ ビアンさん」

「ああ、国からの依頼をゲイルさんと、実力が確かだという武闘大会の優勝者に伝えに来ただけだ……君だつたんだね……」

第二王子の近衛であるビアンとは、数ヶ月前に出会つた。ルクスとも気が合う頼れるお兄さんだ。

「なんか不満？ あつ、なんなら戦つて試す？」

「そんな生き生きと……遠慮させてもらうよ……」

引きつった笑みで辞退するビアンに、ティアは心底残念だと肩を落とす。

そしてビアンの口から、依頼内容が告げられた。

【黒晶山】へ行く騎士や魔術師達の護衛をしてほしいんだ】

【黒晶山？ そんな山あつたつけ？】

「ああ、嬢ちゃんは知らねえか？ 【晶腐石】の採れる山だ】

ゲイルの言葉にティアはきょとんとした。

「へ？ この辺りで【晶腐石】が採れるところって、死の山じゃないの？」

【晶腐石】とは、精霊除けに使われる特殊な石の事だ。重要な会議が行われる部屋には、必ずと言つていいくほど置かれている。精霊の口から情報が外に漏れるのを防いだり、精霊の力で発動する魔術が使えないようにしているのだ。

ティアがサティアという名で生きていた頃、その【晶腐石】が採れる場所といえば、死の山と呼ばれる山だつた。近くにもう一ヶ所あつたとは初耳だと、ティアはシリスに視線を送る。すると、シリスは苦笑しながら答えた。

「誰よ。そんなオシャレな感じに改名した奴……」

名前だけ聞けば、何か珍しい水晶が採れる山だと思つてしまいそうだ。

「年間百人ほどが名前につられて山に入り、魔獣の犠牲となつています」

「それで、俺らを指名したってわけか。だが、なんでわざわざサルバまで来たんだ？」

王都にもランクの高い冒險者はいるだろ」

ゲイルの問いに、ビアンが弱った顔をする。

「それが……」

「全員失敗したのです」

魔術師の男が、ここでようやく口を開いた。歳はビアンよりも下だろうか。

彼は憮然とした表情で今までの失敗を挙げ連ねた。

「――というわけで、護衛対象である騎士や魔術師達にも被害が及び、最後にこちらの

ゲイル様を頼つて参りました。ですが……」

そう言つて視線をティアに向けた男。その目が語っていた。こんな子どもに何ができるのかと。

（そういう目、大好きです！）

ときめきで頬を紅潮させるティア。ゲイルが呆れながら男に忠告する。

「おいおい。そんな目で嬢ちゃんを見んな。死にたいのか？」

「今すぐ訓練場を空けさせましょう」

淡々と言うシリスだが、その瞳は冷たい怒りを感じさせた。

「いや、マスター……俺もこういう世間知らずのバカは嫌いだが、もうちょい時間をやつても罰は当たらんかと……」

「このバカの事は知りません。私はティアが望む事を叶えたいだけです

「ねえねえ。やつていいの？」

「「よくない!!」」

やる気充分なティアを、ゲイルとビアンが揃つて止める。今止めなくては大変な事になると必死だった。

『ティア様。よろしければ、わたくしがこの者を調教いたします』

不意に姿を現したのは、風を司る精靈王——風王だった。水、火、地の精靈王達も、女神であるティアの役に立とうと、幼い頃から傍にいてくれている。

精靈の姿は、精靈視力という特殊な力を持つ者にしか見えない。しかし、精靈王達はその気になれば、今のように力のない者にも姿を見せる事ができるのだ。

「そつか。なら、ここは風王に譲るよ。見るからに弱つちそつだしね」

『お任せください。ティア様のお手を煩わせるほどの相手ではございません』

魔術師の男は、風王の威圧を受けて固まる。

『ひ……っ！』

『さあ、参りますよ』

そう言つた風王は、男をドアごと吹き飛ばした。

「ぐふつ……」

部屋から叩き出された男は、廊下の壁に当たつてあつさりと気絶する。

ティアは残念な気持ちでそれを眺めた。

「あら～……」

「お～い。生きてるか～？」

ゲイルの呼びかけに、男がそろそろと目を開ける。

「うう……はっ……」

「これで分かつたろ？ とりあえず素直に謝つとけ」「……も……申し訳ありませんでした……」

男はヨタヨタと起き上がり、床に膝をついたまま、真っ青な顔で頭を下げた。

「仕方ないなあ……これじやあ遊べないしね。風王、ここはもういいよ」

『残念ですが……承知いたしました……』

風王が消えた事で、少しホッとした雰囲気になる。ティアは最近気付いたのだが、どうやら精靈王達は、無意識に威圧感を出しているようだ。

「そんで、『晶腐石』(じょうふせき)を採りに行く騎士達の護衛を、つて事だつたよな？ どうする？」

嬢ちゃん

ゲイルはティアに決めさせるつもりらしい。ビアンと男が、揃つてティアを見た。

「断る」

「へ？」

「当然でしょ？ お断りだよ」

ティアは、ちよこんと椅子に腰かけて言った。

「そ、そんな事を言わずに、お願ひしますつ。……ほら、マナクもつ」

「お、お願ひします」

ビアンに急かされ、床を這つてきた魔術師の男が、額を床にぶつける勢いで頭を下げる。その隣では、ビアンも同じように頭を下げていた。

「そう言われてもさあ。なんか馬鹿にしてんだよね。本気で頼みたいなら、上の人ちゅうじんが直くで来て、今みたいに頭下げるのが礼儀でしょ？」

ティアの手には、国からの手紙がある。中には『国のために、力を貸すように』とだけ書かれており、正式な依頼書にもなつていなかつたのだ。

「シェリー。これ、ギルドマスター的にはどうなの？」

「本来でしたら、こんなふざけた文など燃やして終わります。ですが、一応ティアの意思を確認しようと思いまして」

「そつか。なら焼却で。お疲れ様でした」

「え!?」

ティアは手紙を一瞬で灰にした。いくら国からの依頼でも、受けけるか受けないかは冒険者が決める。それが、この世界での常識でありルールだつた。

ビアンが慌ててティアに手を伸ばす。

「ちよつ……そこはもうちよつと、俺の顔を立てて……」

「やだよ」

「そ、そう言わずに、お願ひします」

「い・や」

「娘ちゃん……」

頑なな態度のティアに、ゲイルが苦笑する。ビアンは床に座り込んだまま、ティアを

見上げて尋ねた。

「……理由は？　何か理由があるんだろう？」

ティアは仕方ないとばかりに溜め息をつく。

「あのね。あそこのランク知ってる？」

「確か……A？」

ビアンの答えを、シェリスがすかさず訂正した。

「違いますよ。誰も確かめに行きませんから、公式記録が凍結されているんです。今は間違いなくS以上です」

「え、S……」

「ね？　普通断るでしょ？」

この世界では、多くのものが七段階でランク付けされている。Sランクは、Aランクを上回る最高ランクであり、この場合は最も危険度が高い事を示している。これには話を持つってきたビアン達だけでなく、ゲイルも驚いていた。

「マジかよ……S以上って……そんなん無理だろ……」

「だから、諦めなつて上に伝えなよ。人員を割くだけ無駄。むしろ、貴重なAランク冒険者達を捨て駒扱いしたつて事で、訴えられてもおかしくないって」「……」

ビアンとマナクは、揃つて顔を青ざめさせる。Sランクの時点でとんでもないのだ。  
それ以上と言わわれては、想像もできなかつた。

「はい。じやあ、気を付けて帰つてね」

「ま、待つてくれ。さすがに手ぶらで帰るなんてできないんだが……」

「お土産? 何がいいつ? 請求書つ? ちょっと待つてね。思いつきりふっかけた慰謝料の請求書を……」

「待つて! そういうのはいいからつ」

机の上の紙に手を伸ばすティアを、ビアンが必死に止めた。その反応に、ティアはニヤリと笑う。

「ビアンさんさ、今すぐ帰なんくてもよくない? エルさんも隣にいるみたいだしね」「え、あ、気付いていたのか?」

隣の部屋に、第二王子のエルヴァストがいる。王都の学園に通う彼は現在、長期休暇中。ビアンからサルバに行くと聞いて同行をせがんだのだろう。

「うん。のんびり読書タイムっぽいね。なんなら誘拐したげよつか? ……バトラールの名前で」

「つ!」

最後はビアンにしか聞こえないように囁いたティア。

なぜかビアンは嫌な予感がした。

「お返事の手紙は、そっちの彼に届けてもらつてさ。サルバと関係があるのは向こうも分かつてると思うんだよ。前にシェリーと連名で名乗つたし」

ティアはエルヴァストを道具のように扱う重鎮達が許せなくて、この国の城に奇襲をかけた事がある。バトラール・フィスマと名乗り、圧倒的な力によつて、会議室の『晶腐石』しようふせきを破壊した。そのせいで今回、新しい『晶腐石』しようふせきが必要となつたのだ。  
だが、そんな事をビアン達は知らない。独り言のようにも聞こえるティアの言葉を、シリス以外は理解できずにいた。

そこでビアンが、もう一度考え直してくれと頼み込む。

「ふうん……まあ、いいけど……。ゲイルパパ。ちょっとシェリーと話し合うから、この二人とエルさん連れて、みんなのところに行つてくれる? ビアンさん達、どうせ今日はうちに泊まるんでしょ?」

返事がもらえるまで、ビアン達は領主の屋敷に滞在するはずだ。旅の疲れを取る必要もあるから、一日、二日はいるつもりだろう。

「え？ ああ……」

「なら、そういう事で」

「そんじやあ、行くか」

「なんとなく事情を察したゲイルが、二人を連れて部屋を出ていった。

そこで地の精霊王——地王がティアに報告する。

《姫様。ドアに応急処置をしておきましたぞ》

「ありがとうございます。地王爺」

机に向き直ったティアは、先ほど目に入った別の手紙を摘まみ上げる。魔族の言葉で綴られたそれは、他の者が見たところで何が書かれているか分からぬだろう。

内容を素早く一読したティアは、ビアン達の依頼を断るべきではないかも知れないと考へる。

「コレ、わざとここに置いた？」

「ふふっ。ティアなら気付くと思いましてので」

「……本当の用件はこっちだね？」

「はい。ですが、彼らの持つてきた話も役に立つかもしれません」

魔族の国の一大事に発展しかねない内容。もしこれが本当ならば、他国にも働きかける必要がある。だが異種族の国との交流が難しい現代において、それは困難を極めるだろう。

「どうします？」

シェリスの顔からは、いつもの笑みが消えていた。それほど真剣に、この手紙について考へているのだ。

「そうだねえ……万が一のために、国に貸しを作つておくのもいいかも？」

「ですかね」

ティアやシェリスには本来、国的事情など関係ない。全ては共通の友人のため。色々と話を詰めなくてはならないが、一応、今回の依頼を受ける事に決めたのだった。



思わぬ早さで戻ってきた友人からの返事に、魔族の国の王は喜ぶよりも戸惑っていた。自分に関係のない事には、こととん無関心でいられる友人なのだ。返事がなくても仕方

ないとさう思つていた。

連絡を絶つて数百年。他人嫌いの彼が、人族の国でギルドマスターになつたと、風の噂で聞いた。俄かには信じられず、最近まで未だ故郷の森に引き籠つているとばかり思つていたのだ。

『ジルバール・エルース』か……そいつえば、里長になると名前が変わると言つっていたな。しかし、本当にギルドマスターをしているとは……時とは偉大だ……』

その名を持つギルドマスターの噂は聞いている。冒険者ギルドは国境や種族にとらわれない組織であり、この国のギルドを通して他国的情報が入つてくるのだ。

使い魔を通して受け取つた返事は、とても簡潔だった。

『こちらでも状況を調べてみます。今後、連絡は密に取りましょう。同封の魔導具を使ってください』

(魔導具?)

送られてきた小包みに手を伸ばす。中には、黒い蝶を象つたブローチが二つ。

『あなたなら、使い方は分かりますよね』

そのブローチを手に取つて、王は目を見開く。

「なぜっ……シリィが知つてゐるはずは……」

それは、とある友人と遊びの一環として研究し、理論をまとめただけで終わつていた魔導具。シリスが森へ帰つた後に研究したものだから、彼が知り得るはずがない。『あの子から教わつていたのか?』

シリスならば、なんらかの方法でその友人と連絡を取り合つていてもおかしくない。どちらのブローチにも一組の魔石が嵌つてゐる。それぞれのブローチの、魔力が感じられない方の魔石に、自身の魔力を満たしていく。

そして片方のブローチを使い魔へと託し、ひとまず通常業務に戻つた。

数時間後、そろそろ届いたらうかと顔を上げる。そのとき、ちょうど魔石に反応があつた。慌てて触ると、思いがけない幼い声が聞こえてくる。

『聞こえますか? こちらは、サルバ冒険者ギルドです。聞こえますか……カル姐?』

『え、サティア……?』

自分を『カル姐』と呼ぶのは、世界中でただ一人。けれど、その子は随分前に亡くなつてゐるはずだ。

『あ、やつたあ。成功だね。拡声機能もバツチリ。もちろん念話機能もあるからね。ほら、シリィー。カル姐だよ!』

『ふふつ、ティアの作つた魔導具なのですから、失敗するはずがないでしよう』

ブローチからは、カルツォーネの小さな鳴咽が聞こえていた。それを搔き消すように、ティアは明るい声で話し続ける。

「それでね、そのクソ天使の羽根は、次会った時に巻り取つてやるつて決めたの」

「サ……サティア……本当に君なのか？」  
『えへへ。本当だよ。こう言うのも変だけど、ただいま、カル姐』  
「ふつ……ああ……おかえり……」

（おかげり、私の可愛い友人……）  
それからしばらくの間、執務室には魔王カルツォーネの鳴咽と、ティアとシリスの賑やかな会話が響くのだった。

『いや、私だってたまには失敗するよ……それより、カル姐？ お~い。ちゃんと喋つてよお』

（サティアだつ!!）



執務机に座るティアの後ろには、シェリスが立っていた。

「やっぱり毫り取つた下は鳥肌なのでしょうか？」

「おお、なるほど。考えた事もなかつたよ……むしろ、あの天使の翼の部分つて、皮とか付いてるの？」

「おそらく……」

「そういう文献とかあつたら面白いのに」

そんな話をしている間に、カルツォーネも笑い出す。

『ふふふ、君は相変わらずだね。よかつたら、そんな文献がないか探しに来るかい？』  
『いいのっ？ 魔族の集めた文献の量つてすごいんでしょ？ 昔は世界中に諜報員ちょうほういんが

散らばつて、色々な情報を集めてたもんね』

魔族の歴史は長い。古代から続く種族としての矜持きょうじもあって、多くの古い文献を国で保管している。情報や知識を重要視する魔族は、それらを世界中から集める事を使命としていた。

カルツォーネも、シェリス達と一緒に冒險者として世界中を回りつつ、様々な種族の知識や歴史、時には滞在した国の内情をも調べていた。

『言つておくが、あれは諜報員ちょうほういんではないぞ？ 情報を集めるのは一種の趣味という

か……職業病しょくぎょうびというか……』

強い知識欲。それは魔族の持つ特性だった。常に新しい発見や使えそうな情報を集めている。

『なんかカル姐ねえつて、よく犯罪者を捕まえてたよね』

『国からの指令がきてたからね。主に兄貴達からだが』

魔族は、罪や法を犯した者に厳しい。情報収集に長けた魔族だからこそ、同族が国外で犯罪者となつた場合も、その対処は早かつた。

『一度、助けてもらつたよね。あの時の犯人は魔族だつたから、あれも仕事だつたんでしょう？』

ティアは一度、姉を誘拐された事がある。その黒幕をカルツォーネが追つていたらしく、ティアが姉を救うためにアジトへ潜入した時、助けてもらつたのだ。

『ああ。あいつは国が禁止した魔導具を作つて、国外にばら撒いていたからな』  
『う……なんか思い出してきた……アブナイ感じの人だつたね……そうだつ』

いい事を思いついたティアは、机の上のブローチに向かつて身を乗り出す。  
『魔族の国ならあるかな？』『神具しんぐ』について書かれた文献か資料

では再現できない大きな力を秘めている。だが時に地上に混乱をもたらす、厄介なものでもあった。

『これまた突然だね……確か昔、それを調べていた者がいたはずだよ。でも、あんな使えないものをどうするんだい？』

『使えない……？』

ティアが首を傾げる。シェリスとしても、その言葉には納得できなかつた。どういう事かと、カルツォーネの次の言葉を待つ。

『ああ、なるほど……知られてはいないかもね……。『神具』は、それを受け継ぐ血族の者にしか扱えないんだ』

『ほう……』

『っそんな……』

納得するシェリスと違い、ティアは何やら衝撃を受けていた。

『しかも血族の中でも、鍵となる因子……特殊な魔力の波動を持つた者でないと、正しく発動しないらしい。だが、本来の力を引き出せないだけで、少しでもその血を引いた者なら、なんとか扱えると言われている』

『では、その『神具』を受け継ぐ血族を探せば……ティア？　なんだか顔色が悪いです

よ？』  

ティアは一人考え込むような体勢で固まつていていた。心配になつたシェリスは、そつと手を伸ばし、その頬に触れる。するとティアは、正気に戻つたかのように目を瞬かせた。  
 「あ、ごめん。考え事してた。えへっと、血族だつたよね。そもそもちで分かるかな？」  
 「どうだろう……元は辿れるかもしれないけれど……」  
 「それでもいい。できれば知りたい」

『分かつた。調べておくよ』

シェリスの手をゆっくりと握つて頬から離し、ティアはようやく本題に入る。

『今度はカル姐ねえの方の話を聞こうか。何か、国で困つた事があるんだよね？』

『ああ。聞いてもらえるかな』

『もちろん。シェリーもね』

『仕方ありませんね』

大切な友人の頼みならば、どんなに困難な事であつても力を貸す。ティアとシェリスは笑みを浮かべて頷いた。



屋敷に帰ったティアは、応接室で待っていたビアンとマナクに依頼の件で返事をした。

「受けてくれるのか？」

「うん。ただし、人員はこっちで用意する」

「え？ それはどうい……」

向かいのソファで怪訝な顔をするビアンに、ティアははつきりと言った。

「あそこはSランクだって言つたでしょ？ そんな場所に、足手まといにしかならない騎士や魔術師を連れていけないよ。大体、あそこじや魔術師なんて役に立たないもの」その言葉に素早く反応したのは、ビアンの隣に座るマナクだ。

「そ、そんな事はっ」

「あるんだよ。おバカ」

「……」

ソファに足を抱えて座るティアに、呆れたように言われたマナク。ムツとした様子の彼を、ビアンがすかさず目で制した。

そんな二人の様子を観察していたティアは、隣に座るゲイルに尋ねる。

「なんだかさ。あそこに関する知識つていうか、認識が甘いよね？ こんなもんなの？」昔から死の山は危険な場所だった。その特殊な環境によつて突然変異した魔獣達が、常にその力を変化させ続けている。あれから約五百年。どれほど異常な生き物が生まれているのか、ティアにも想像できなかつた。

「あそこは『晶腐石』しか採れねえだろ？」その上、魔術が使える場所だ。冒險者でも、依頼がなければ入る奴はそうそういねえ。だから、『危ねえから入るな』って情報しか伝わつてねえんだよな」

「ふうん」

「あの……さすがに国からの代表者が、何人かついていく事になると思うんだが……」

「そんなビアンの言葉は想定済みだ。

「それは構わないけど、守つてあげる余裕はないから、遺書を用意しておくくらいは覚悟ができる人にしてね」

「……と、とりあえず、そう国に伝えます……」

「うん。そうして。それまでの間、エルさんは人質かな」

「えっ！」

今はベリアローズの部屋にいるエルヴァスト。久しぶりに友人と会い、歓談中のことだ。

「どうせ戻つてくるんだし、いいでしょ？ 心配なら、早く済ませてくるよに」

「……はい……」

こうして翌日、ビアンとマナクは一人だけで王都へ帰つていったのだった。

### 「世話になる」

ティアに再会したエルヴァストが、嬉しそうに挨拶する。サルバでの滞在日数がかなり延びた事で、喜びが全面に出ていた。ティアも笑顔で応える。

### 「どうぞごゆづくり！」

人好きのする笑顔が魅力的な第二王子。元メイドの側妃を母に持ち、王子でありながら肩身の狭い思いをしてきた。大臣達からはいざという時、王太子の身代わりとなるよう言われている。

それが長くエルヴァストを苦しめていたのだが、ティアやベリアローズと出会い、友人になる事で、彼は本当の笑顔を取り戻した。何より一番大きかったのは、ティアが『身代わりには決してさせない』と約束した事だろう。エルヴァストの指には、その証である指輪が光っていた。

このサルバにはAランク冒険者のゲイルがいて、森の賢者と呼ばれるシリエリスもいる。その上、ティアやマティもいるのだ。これほど安全な場所はそうそうない。更にはエルヴァストにとつて、ここは友人の家であり、滞在するのになんの不都合もない。そう言って父王や重鎮達を説得し、今回の外泊許可をもらつたのだという。

そしてビアン達が王都へ向けて出発した次の日。ティアとベリアローズが出かけると聞いて、エルヴァストも一緒についてきた。今は三人でサルバの街を歩いている。

### 「それで？ これからどこに行くんだ？」

### 「どうせなら広い場所で遊びたいでしょ？」

### 「遊びのかつ？ 何をするんだつ？」

エルヴァストにとつては、友人と遊び事自体が初めてだ。朝から笑顔が輝きまくつている。

一方、ベリアローズは青ざめた顔をしていた。

「エル……お、追いか……いや、鬼ごっこになると思うんだが……」

「何つ？ あの噂に聞く命がけの遊びか？ 体力作りにはもつてこいだと聞いたぞ」

「……そ、そうだな……確かに体力はついた……」

本当の鬼ごっこを知らないエルヴァストは、逆に幸せかもしれないと思うベリアロー

「体力は重要だもんね。今日はゲストも呼んでるから」

「ゲスト？」

「うん。人数は多い方が楽しいよね」

「そうだな」

「…………」

楽しみだと笑うエルヴァストの隣で、ベリアローズは不安でいっぱいだった。そのまま隣では、黒い子犬姿のマティがすました顔で歩いている。

「ティア……ルクスとクロノスはどうしたんだ？」

「ルクスはそのゲストさんを呼びに行つてる。クロちゃんには別に仕事を頼んだの。なあに？ お兄様。護衛が私とマティだけじゃ心配とか？」

「い、いや……」

ティアの実力は、先日の武闘大会によって、このサルバでは知らない者がいないほど知れ渡っていた。奇しくも、あの敗退者達との特別試合が、ティアを『絶対に手を出してはいけない者』だと人々に認識させたようだ。おかげで、こうして子ども達だけで街を歩いていても、なんの問題もない。

街を見回しながら楽しげに歩いていたエルヴァストが、不意にティアへ声をかける。

「今更だが、私もティアと呼んでいいのか？」

「もちろん。私は……エル兄様って呼んでいい？」

「つ、兄と呼んでくれるのかつ？」

「うん。ダメ？」

「まさかっ！ よろしく頼むよ！」

こんな会話が聞こえた街の人々は、微笑ましく思いながらティアを見送る。彼らは知らない。彼女がこの後、兄達を追い詰める鬼のような妹だという事を。

一方、ルクスがどこにいるかといえば、冒險者ギルドにあるシェリスの執務室だった。今は部屋の隅に不機嫌そうに控えている。

そこにはシェリスに呼び出されたザランとボランもいた。

「それで、マスター……俺らを指名するクエストってなんなんですか？」

「我々には、特に共通点もないのですが？」

れていた。男氣溢れる性格と素直なところが、多くの者に愛されるポイントだ。

そしてボランは、このサルバでゲイルに次ぐ実力の持ち主だった。Bランク認定を受けたベテランで、多くの冒險者達から頼りにされている。先日行なわれた武闘大会では、ティアの予選の審査員を務めていた。

いつも通りの微笑みを浮かべたシェリスが、二人の質問に答える。

「あなたの方を指名したのはティアです。なぜと聞きたいのは私の方なのですよ?」

「……」

目の奥に揺らめいているのは、嫉妬の炎だ。それを見た二人は、お互に目配せし合う。余計な事は言わず、改めてクエストの内容について尋ねた。

「お二人共、黒晶山はご存知ですね?」

「はい……」

「そりやあ……」

返事を濁したのは、嫌な予感しかしなかったからだ。ティアが指名したというだけで反射的に断りそうになつたのに、危険な場所と言われる黒晶山でのクエストなど冗談ではないと思った。

二人はすぐさま、どう辞退するべきかと考える。しかし、それを予想できないシェリ

スではなかつた。

「まさか辞退するなんて言いませんよね? 他ならぬティアが指名したのです。その信頼を、あなた方ごとき……いえ、あなた方が裏切つていいとでも?」

「……いいえ……」

「ならばよろしい。詳細はティアから聞くように。この後、ルクス君についていつく

ださい」

半ば強制的に参加させられたクエストに戸惑いながら、二人はルクスの後について部屋を出ていった。

「……私も行ければいいのですけどね……」

残されたシェリスは、そんな独り言を呟きながら、先日のカルツォーネの話を思い出していた。

状況を聞けば聞くほど、ある組織の影を感じられる。

「……『青の血脉』……ですね……」

『青の血脉』は、数百年前から暗躍する組織だ。人族至上主義を唱え、今は『神具』を使つて密かに問題を起こしている。ティアもそれに気付いているだろう。

いつか彼らと対峙する時のためにも、今回の件で国に恩を売つておくべきだ。加えて

今のうちに、組織の情報をできるだけ多く手に入れておく必要もある。

「誰であろうと、ティアが生きる世界で勝手など許しませんよ」

ティアの笑顔と自由を守るために、何一つ失う事なく完璧に。ティアが望む時に、必要なものや場所を用意する。それは自分にしかできない事だとシリスは思っていた。愛するティアのためならば、労は惜しまない。それが、シリスの『愛』なのだから。



ティアは家の中で一人、テーブルの上に広げた地図や資料を整理していた。

「ん？」

シリスの声が聞こえたような気がして、反射的に窓の外を見る。

「気のせいか。ここに来るはずないもんね」

その時、誰かが家に駆け込んできた。

「ティアっ。お、終わつたぞ……」

「おお。早かったねぇ」

壁に片手をついて、疲労で倒れそうな体を支えるベリアローズ。外にはマティとエル

ヴァストの気配もあり、森から無事に戻ってきたのだと確認できた。

ここは、いつも訓練に使う森の手前の草原だ。その只中に今、一つの家が建っている。ティアとシリスで作り上げた魔道具、【ゲルヴァローズの欠片】かけら。普段は大きな卵型の石にしか見えないが、契約した者の意思一つで、家を出現させる事ができるのだ。内装も立派で、使い勝手がいい。屋敷ではしづらい薬学の研究をしたり、冒険者としての計画を練つたりするには、もつてこいの場所だ。

ベリアローズ達がマティと鬼ごっこをしている間、ティアは日々行く事になる黒晶山こくしょうざんの位置や現状について調べていた。

「それじゃあ、ルクス達が来るまで休憩がてらお茶でもしようか」

「……その前に、エルが動けるか見てくる……」

「うん。ダメそななら、これ飲んでもらつて。お兄様もよかつたらどうぞ！」

ティアが渡したのは、特製の滋養強壮ドリンクだ。

「……なんでこんなに毒々しい色なんだ……いや、いいつ！ 何が入ってるかは言わなくていいつ」

「あ、じゃあこっちにする？ 効能は一緒だよ？」

そう言って取り出したのは、同じ大きさの瓶。ベリアローズが先に受け取ったものは

血のよう赤かったが、こちらは薬草由来の濃い緑だった。

どつちがいいかと問われれば、正体不明の赤い液体よりも、健康によさそうな緑色の液体を選ぶはず。当然ベリアローズもこちらを選んだ。

「どうぞ、グイッとね。効能は保証する」

「あ、ああ……」

緑色の液体を一気に呷あおるベリアローズ。それを確認する事なく、ティアは次に必要になるであろうものを用意していた。

「つー……!!」

衝撃と共に取り落とされた瓶は、ティアがしつかりキヤツチし、何事もなかつたかのようにテーブルへ置いた。

「味は保証できないんだよね。苦いわけじゃないのに、なんでか不味まづいんだよ。何味なのかも分かんないの」

そんな事よりも助けてくれと、床に手をついて苦しむベリアローズ。そんな兄に、ティアはコップになみなみと注いだ液体を差し出した。

「はい。果実水」

それをまた一気に飲み干すベリアローズ。ティアは果実水の入った瓶をテーブルに置

いて、先ほど飲み干されたドリンクの瓶を手に取る。

「なんでかなあ……」

「ま……まだ不味まづい……」

涙目になつたベリアローズは、おかわりの果実水をコップに注ぎながら、ティアを恨めしそうに見る。

「そうなんだよね。果実水ごときじや苦味は消せても、不味まづいのは消せないんだよ……だから、とつておきのものでなんとか味を誤魔化ごまかしたんだけど……」

そう言つて赤い液体の入つた瓶を手に取るティアに、ベリアローズは目に涙を浮かべたまま尋ねた。

「そつちが改良版なのか？ なんで言わないつ！」

「ん？ だから先にこつちを渡したんじやん。信用しなかつたお兄様が悪い」

「……」

なぜかベリアローズが悪い事になつていて。とはい『信用できるか！』という心の声を口に出す勇気は、彼にはなかつた。

しかし、ベリアローズは感じていた。先ほどよりも確実に体が軽くなつていて。苦しかつた息も落ち着き、震えていた足もいつも通りだ。

そんな事を確認している間も、ティアの独り言は続く。

「変な味を抑えるために薄めると、量をこの三倍くらいにしないと効果がないんだよね……」

そこにエルヴァストがやつてきた。

「ベル……回復が早いな……」

「え？ ああ、ティアに滋養強壮ドリンクをもらつたから……」

「何？ 私はないのか？」

そんなエルヴァストに、ティアが赤い液体の瓶を差し出した。

「これが？ いただきます」

「え、あっ！」

慌てるベリアローズの前で、エルヴァストはなんの躊躇もなく一気に飲み干す。

「ぶはっ！ なんだコレ!? 酸っぱ……いや、甘っ……つ？」

どうやら味覚が大混乱中のことだ。

「不味くはないんだけどね。量も濃度も、これがベストだし？」

「エ、エルフ。果実水飲むか？」

「……もうう……」

ベリアローズが差し出した果実水を、今度は少しづつ飲むエルヴァスト。そんな様子を見ながら、ティアは面白そうに咳いた。

「なんか、毒薬より効果あるかも？ 育ちがいい貴族には効果観面？」

「……」

悪戯を思いついたような表情のティアに、二人は何も言えなかつた。

それに気をよくしたティアは、どんどん調子に乗っていく。

「ふふん。これで検証もバツチリだし、商品化を考えなきや。お店で売るなら二つを並べて売りたいよね……うんうん。絶対その方が面白いっ！」

「……」

「あ……そうなると他のみんなにも試して、どっちを選ぶ人が多いか検証しとくべきかな？ 需要と供給のバランスは見極めないと……ルクス達、そろそろ来るよね」

止めなくていいのだろうかと、二人は目で語り合う。そして、最終的に自分達には何

もできないと悟り、がっくりと肩を落とした。

外門の辺りにルクスの気配を感じたティアは、いつもの結界を解く。

「マテイ。結界を解いたから、近くを人が通るかも。見られちゃダメだよ」

『はあい。とりあえずここでお昼寝してる』

## 立ち読みサンプルはここまで